徳永Ｂ遺跡第４次調査現地説明会資料

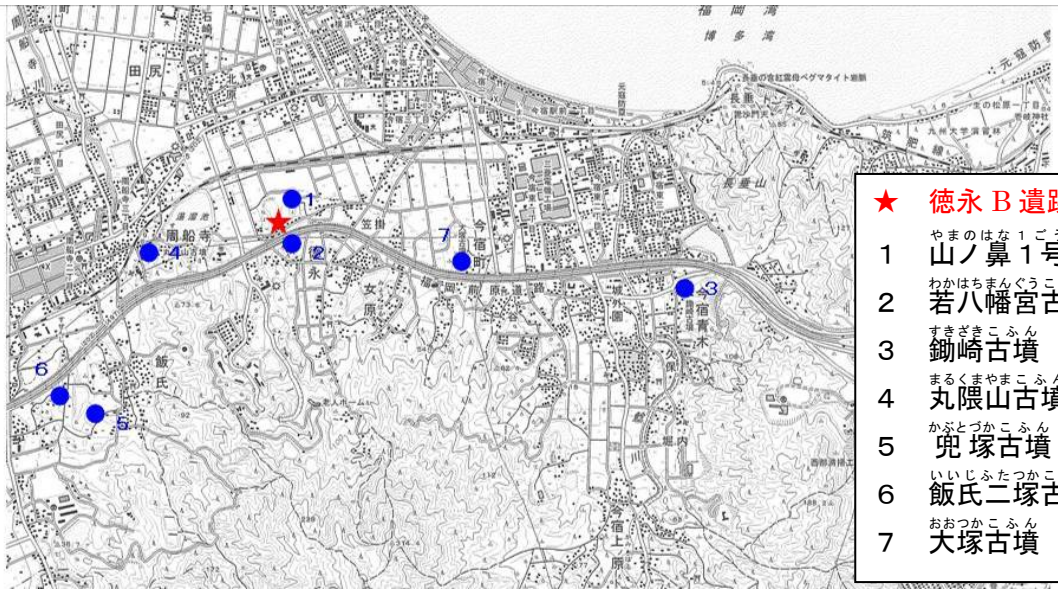
平成 24 年６月９日（土）
福岡市経済観光文化局
文化財部埋蔵文化財調査課

徳永Ｂ遺跡第４次調査成果について

―国史跡 今宿古墳群に連なる古墳の調査―

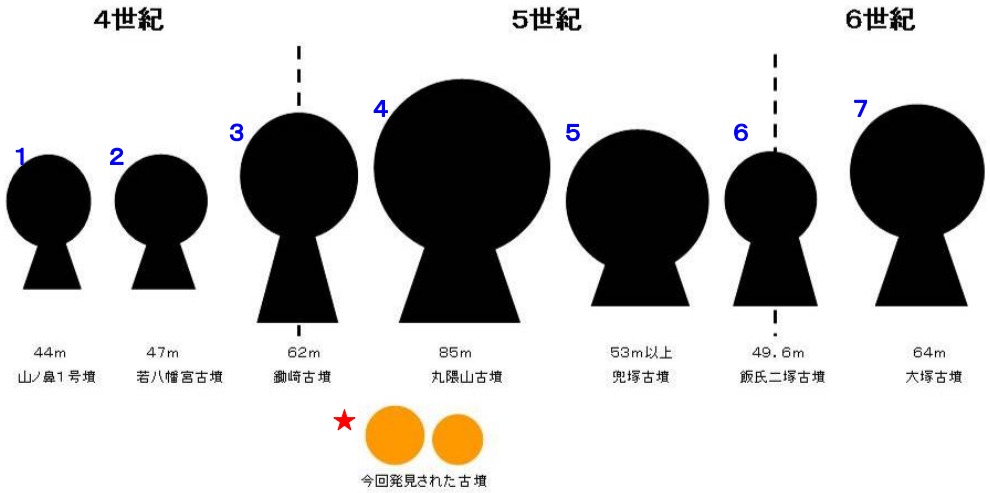
福岡市埋蔵文化財調査課は現在、伊都土地区画整理事業地内（西区徳永）の徳永 B 遺跡第４次調査を進めており、２基の古墳をはじめとした多くの成果を得ました。

特に古墳は国史跡 今宿古墳群の中の、山ノ鼻１号墳、若八幡宮古墳にほど近い場所にあり、造られた時代からもそれらの古墳との関連が推測されます。



＊地図と下図の番号は対応しています。

今宿古墳群の変遷



古墳１

- ５世紀前半ごろの直径約 10mの円墳
- 埋葬主体部は、長さ約 200 cm、幅約 110 cmの床面に小さな石を敷き詰めた石室
- 床面を板状の石で仕切って、石室内を分けている
- 鉄鉗（＊１）・刀・剣・刀子・鉇（*2）などの鉄器・ピンセット状の鉄器、滑石製臼玉約 100 点などが副葬
- 周溝からは、土師器の小型壺・高坏などが出土

小型壺

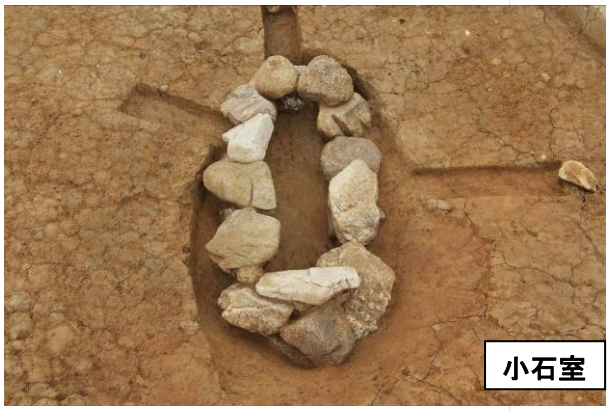
古墳２

- ５世紀前半ごろの直径約８ｍの円墳
- 埋葬主体部は、幅約 30cm の竪穴式石室
- 側壁に赤色顔料を塗布
- 碧玉製管玉・小玉が出土
- 周溝からは、土師器の小型壺などが出土

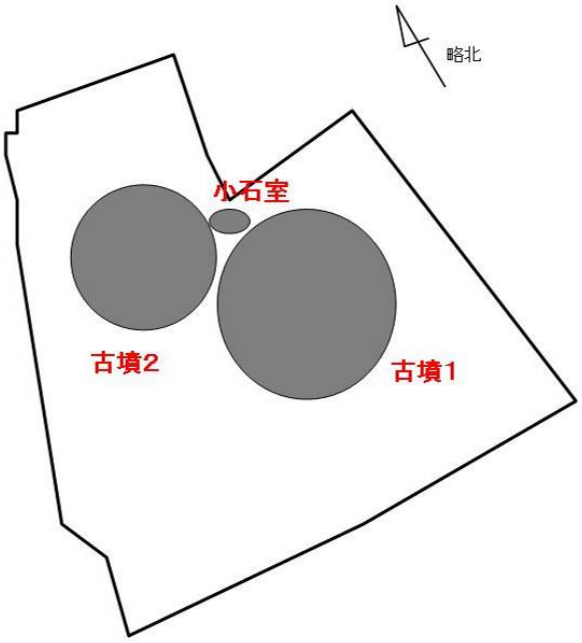
古墳２

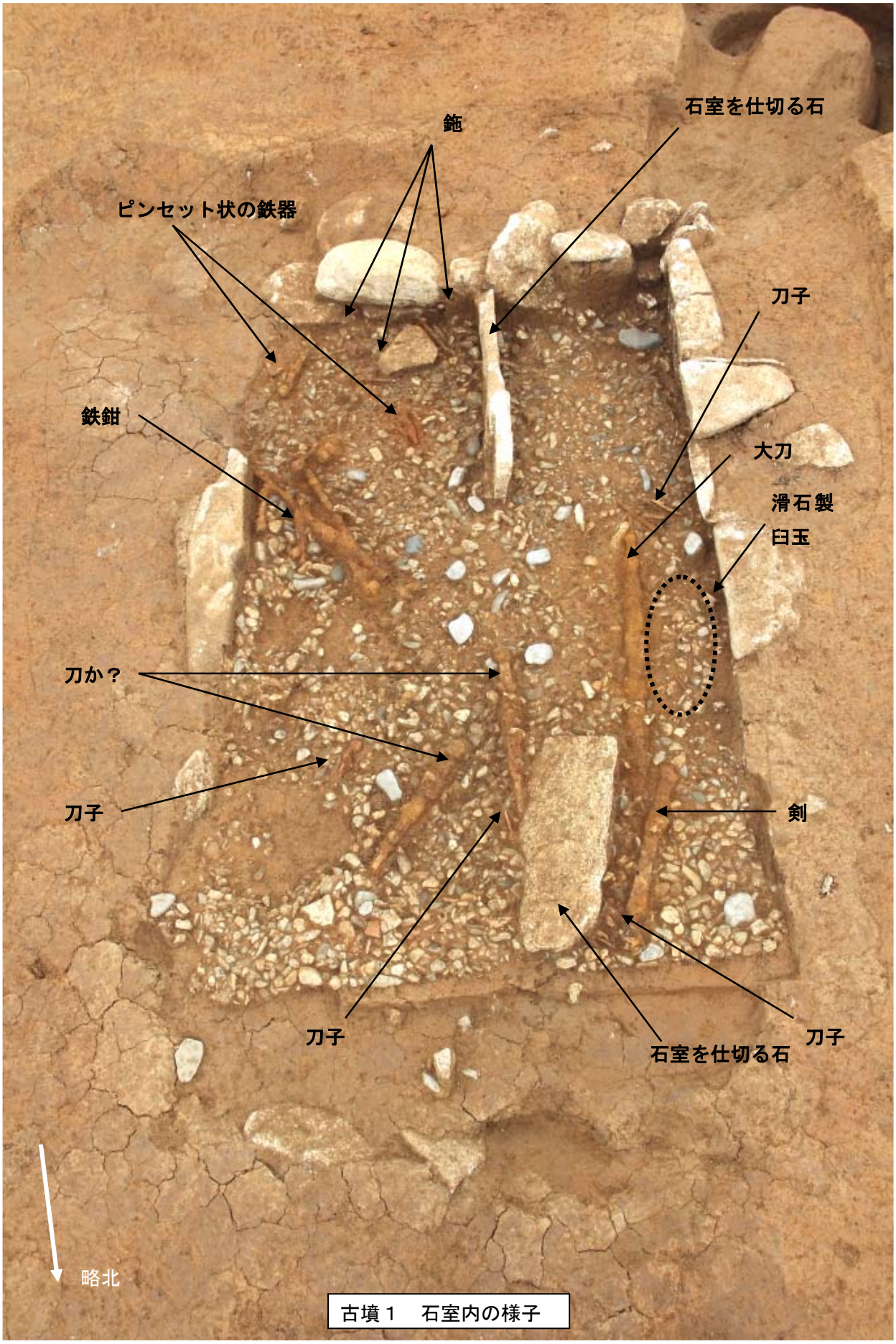
小石室

- 古墳１と古墳２の間にある、長さ約 80 cm、幅約 20 cmの石室
- 古墳１・２のどちらかに伴う可能性が高い


小石室

徳永B遺跡第4次調査区





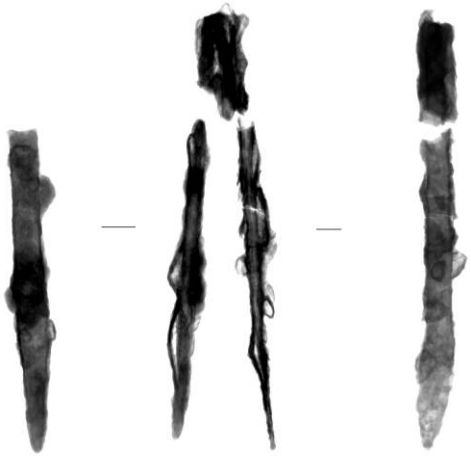
古墳１　石室内の様子

古墳１には、鍛冶(かじ)に使用する鉄鉗など、特徴的な鉄製品などが副葬されていたことから、その被葬者(ひそうしゃ)は鉄生産に携わった、あるいはそれを統括していた人物の可能性があります。

また、古墳時代において、鉄の生産や加工は首長層が掌握していたと考えられることから、古墳１の被葬者は、今宿古墳群の首長層に従う鍛冶工人だったのではないかと推測されます。

古墳１（東から）

古墳１出土鉄鉗Ｘ線写真



ピンセット状の鉄器Ｘ線写真

(*1)鉄鉗（かなはし）とは？

主として鍛冶具として使用される、熱した鉄をはさむための道具です。別名・火バサミ、鋏（やっとこ）。今回出土した鉄鉗は、長さ約 50 ㎝と５世紀前半としては大きなものです。

(*2) 鉋（やりがんな）とは？

木材の表面を削り、なめらかに仕上げる道具。